

新潟町の変遷

地形の変化で生まれた新しい町

町並みのはじまり

江戸時代のはじめ、新潟町は今より海岸寄り(現在の寄居町、旭町、大畑周辺)に位置していました(古新潟町)。しかし阿賀野川と信濃川が合流して湊が浅くなって使えなくなったため川に近い場所へ町を移転、**明暦元(1655)年**にはその工事がほぼ完了しました。このときできたのが現在の新潟町です。当時は上(かみ)が**白山神社境内地**、下(しも)が**洲崎町(古町通13番町辺り)**まで、幅は現在の**上大川前通から西堀通までの間**でした。

移転した町には、川と海から運ばれる荷を運搬・取引するため、信濃川の流れに沿う南北方向に寺町堀(西堀)・片原堀(東堀)と「通り」、これらに直交する東西方向に5本の「横堀」と多くの「小路」が設けられました。



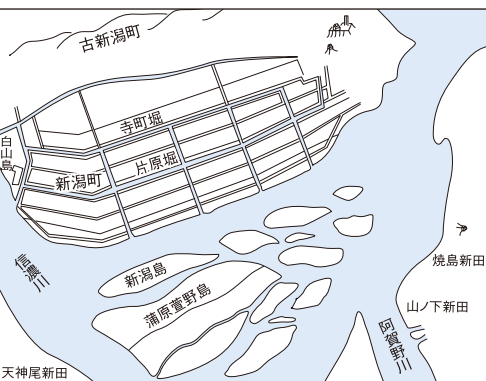
新潟町絵図 文政6(1823)年8月写 新潟市歴史博物館蔵
信濃川に平行に「通り」が、直行する様に「小路」がのびています。また「掘」がめぐられ、砂丘と町のキワ(現在の西堀通)には寺町が位置しているのがわかります。

新しい町の誕生と発展

1. 伸びた「河口」

信濃川の河口は、川によって運ばれる土砂の堆積によって東に移動し、町はずれの洲崎町から河口までの距離は毎年伸びていきました。また、信濃川左岸には砂州や中州が寄り付いていきます。町のはずれだった洲崎町は**古洲崎町**とよばれるようになり、龍照寺(横七番町通1)の前が**新洲崎町**となります。この周辺は後に「**新地(しんち)**」ともよばれました。

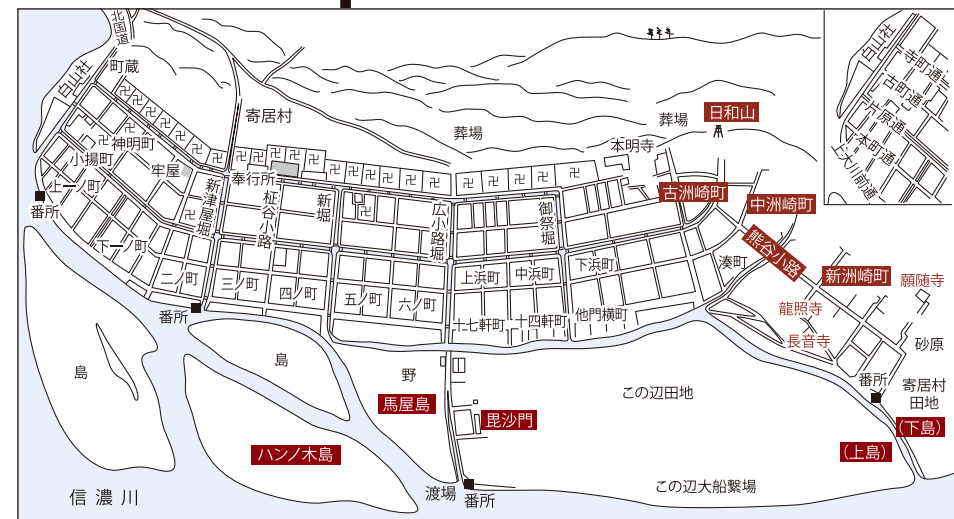
延享2(1745)年には願随寺(元祝町)が、宝暦10(1780)年には長音寺(夕栄町)が建立されます。藩は寺に広大な土地を周囲に与えましたが、この土地を町人が借りて住み、新しい町ができました。



図A●元禄12(1699)年頃の新潟町と信濃川
〔新潟歴史双書1 新潟湊の繁栄から〕



上から龍照寺、願随寺、長音寺



図B●享和元(1801)年頃の新潟町〔新潟市史 通史編2〕から

2. 「島」の開発

信濃川左岸の新潟町側に寄り付いた砂州や中州は「島」とよばれる新しい土地になり、さまざまに開発されていきます。

元文元(1736)年、長老格の寺山彦左衛門が長岡藩から広小路向かいの島内に敷地を与えられました。邸内に毘沙門天を祀っていたので、彦左衛門の家を中心とする一帯は「**毘沙門島**」とよばれ(現在の南毘沙門町、北毘沙門町、相生町、芳町)、後に新潟の歓楽街の一つとなります。

宝暦8(1758)年には、飢饉による不況の対策として新洲崎町近くの「**下島**」「**上島**」の開墾が始まります。「**榛島(はんのきじま)**」(現在の礎町)にはナンが多く植えられたため、「**梨島(なしじま)**」ともよばれました。



現在の毘沙門島周辺

下島周辺(下島公園)



榛島周辺(礎町近辺)

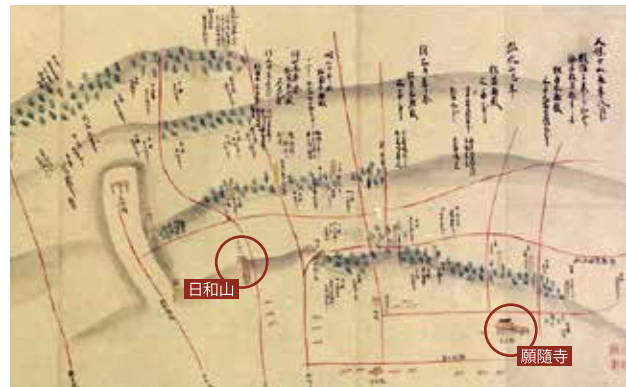
日和山共同墓地界隈に残る砂防林

3. 「砂丘」と砂防事業

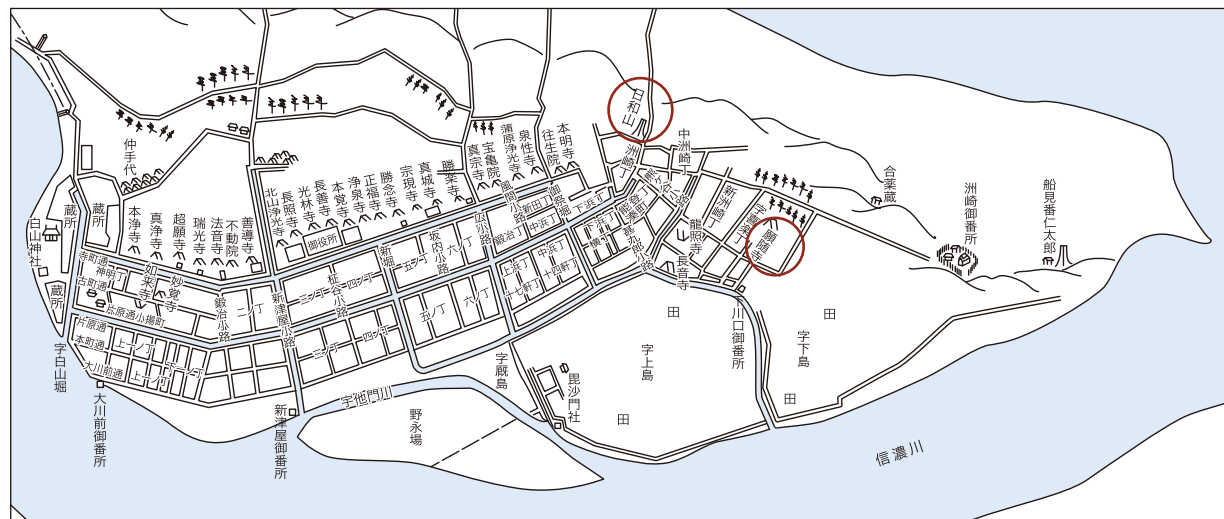
一方、海岸側では土砂の堆積が砂丘を増やし、海岸線もまた次第に伸びていきました。新潟町の人々は信濃川寄りの土地を「**浜手**」、砂丘がある海岸寄りを「**山手**」とよんだそうです。嘉永年間(1848~54)、仲役所の手代たちが寄居村から土地を借り山手側に家を建てます。ここは高台で、最初に朝日があたるので「**朝日町**」と名付けられました。現在の旭町の始まりです。

砂丘は深刻な飛砂被害も生みました。新潟町の砂防林事業は元和3(1617)年の**長岡藩主・堀直寄**の植林がはじまりとされています。**初代新潟奉行の川村修就(ながたか)**も砂防林工事を継続し、天保15(1844)年に**日和山**から**願随寺**付近に松苗を植え付けさせました。これは砂防とともに、新たに利用できる土地の拡大も意図して行われたものです。

新潟海浜松苗木植付場所図(部分) 嘉永2(1849)年頃



新潟市歴史博物館蔵



図C●慶応2(1866)年の新潟町の町名と小路名〔新潟市史 資料編2〕から

新潟開港

時代とともに拡大し変化する町

開港と町の拡大

嘉永7(1854)年、日米和親条約の締結により日本の鎖国体制は終わりを告げ、安政5(1858)年の修好通商条約で新潟は開港場の一つとしてあげられます。明治元(1868)年、新政府が新潟の開港を布告。翌年「**新潟運上所(うんじょうしょ)**」(のち税関に名称を変更)が建設され、これを機に明治初期の町の改造が始まりました。

新潟県は「**厩島(うまやじま)**」「**上島**」「**下島**」など運上所周辺の低湿地や砂丘地を有力者に分譲し、開発をさせます(早川町、本間町、山田町、窪田町、忠蔵町、船見町、入船町などは買い受けた人にちなんだ町名)。「上島」は運上所と大川前通を結ぶ湊町通を軸とした街区、「下島」は川沿いに伸びる道路と熊谷小路(横七番町)を軸にした街区が地図上でできます。しかし実際の開発は遅れ、厩島や湊町付近以外に家が建つのは明治末以降でした。

一方、「**秣島**」「**榛島**」は楠本県令の主導の下、開化の町の規範として宅地化が進みました。このときできたのが「**礎町通り**」、もう1本の通りに面した町は「**雪町**」「**花町**」「**月町**」と命名されます。島の周囲には他門川に沿った「**新島町通り**」と信濃川に沿った「**下大川前通り**」が作られ、これらを軸にした町割が実施されました。



「新潟湊之真景」(井上文昌画)に蒸気船来航が描かれています。
※みなとびあ所蔵:詳細は中面「願随寺」参照



明治初年の新潟税関。手前は舂下川にかかる青柳橋。



これは新潟市の市章

江戸時代は「湊」、明治開港後は「港」の字を使ってるんですね。新潟市の市章では、「錨」のマークと中央の「五」が五港を、てっぺんの雪環が「新潟」をあらわしているんですや。ご存知でした？



新潟港は2019年1月1日開港150年をむかえました。



昭和12(1937)年頃の新潟市(日本海大博覧会事務局「新潟市鳥瞰図」吉田初三郎画、野内隆裕氏所蔵)
※この鳥瞰図は、昭和13年に予定されていた「日本海大博覧会」宣伝用に当時作成されたものですが、一部当時のまちの様子と異なる部分があります。

築港へむけて

1. 灯台と「水戸教(みときょう)」

明治2(1869)年、沖ノ口番所跡地に最初の灯台が、同10(1877)年、船見町2丁目に2代目の灯台が設置されます。同14(1881)年に3代目が、大正14(1925)年には突堤先端に4代目が設置されました。

沖合いの船の案内は灯台ですが、信濃川の河口である新潟港には、危険な瀬を避けて船を誘導し出航も先導する「**水戸教**」という**水先案内**が必要でした。江戸時代に回船問屋から委託を受けた伊藤仁太郎は長くこの任につき、新潟港が近代的な港になるまで伊藤家がこの重要な役割を果たし続けました。



初代の灯台

3代目の灯台



4代目の灯台

水戸教公園(雲雀町)

3. 変わる町並み

明治の末、「上島」(多門川と舂下川、信濃川に囲まれた地域)には住宅や商店が密集するようになり、「下島」(窪田町、浮洲町、元島町から東、舂下川の北の地域)には新潟鉄工所入舟工場、新潟瓦斯会社の工場が建設され、小さな工場や住宅も税関から河口へ伸びる道路に沿って建ち始めました。

また、田中町から大畑、南浜、東中通、旭町方面の砂丘と西堀の寺の間の地域には一方で屋敷が並び、一方で長屋が建つ地域となります。こうして旧来の町の周囲に新しい町並が拡大していきました。